增、一種雲州蜜柑ト稱スル者、味殊ニ美ナリ、

〔日本山海名物圖繪二〕江戸四日市ノ蜜柑市

江戸の市中に賣は、おほく駿河より出紀州みかんも大坂より舟廻しにて下る也江戸四日市の廣小路に籠入のみかん山のごとくに高くつみて、毎日々々賣買の商人群集す、江戸は日本第一の都會にて繁昌のつなれば、京大坂にまさりて賑はへり、

〔紀州柑橘類蕃殖來歷〕來歷傳記

有田郡蜜柑の儀は、享保十九寅年より百六拾年程以前天正二甲戌年中、同郡內宮原組糸我庄中番村伊藤仙右衞門と申者、肥後國八代と申所より蜜柑小木を求來り、始て宮原糸我の庄內に植繼候處、蜜柑土地に應じ、風味無比類色香菓の形ち他國に勝れ候に付、次第に村々へ植廣げ申候、百三拾年以前慶長の始には、保田の庄田殿の庄內へも、一ヶ村に五拾本七拾本程ヅヽ生立候由、夫より年々相增、籠數も出候に付、其比大坂堺伏見等へ小船にて積送り申候、右の所々へも山城の國より蜜柑出候得共、有田の蜜柑格別勝れ申に付、直段高直に賣れ申候由、其後百年以前寬永十一戊年、初て瀧が原村藤兵衞と申者、蜜柑籠數四百籠計荷物に相認、江戸廻し致し、右藤兵衞江戸表へ到著致し、所々承合、京橋新山屋仁左衞門と申御水菓子屋を問屋に賴み、橘類取扱致し候仲買共を集め蜜柑賣候處、江戸表へは伊豆駿河三河上總の國々より蜜柑出候得共、有田の蜜柑にくらべ候ては、中々似寄不申候に付、江戸にて流布致候はゞ、紀州蜜柑の風味は甘露に酸き味を兼黃金の色に紅を交へ、菓の形は地方圓の圖を備へ、異國に越したる和國の珍菓不可有此上と、貴賤擧て賞愛致し、金子一圓を以て蜜柑一籠半の直段に賣拂歸國致し候由、右の樣子蜜柑持の百姓共承り、其翌年は右の藤兵衞を賴一所に江戸廻し致呉候樣にと申に付、自他の蜜柑凡二千籠計集め積送り、前年の通の場所にて、一籠に付金子二分程づゝに賣拂罷登り候由、夫より次